

成人余暇活動グループ活性化の要因についての一考察

上 條 秀 元

(国立教育会館社会教育研修所)

はじめに

今日、各地において成人の余暇活動グループが発展しつつあり、生涯学習における主要な学習形態の一つとなっている。

しかし、これらの活動に立ち入ってみると、「会員の時間がそろわない」、「会員が少ない」、「適当な場・施設が少ない」など、いくつかの問題点をかかえたグループも少なくない。また、「活動が単に会員の自己満足に終わっている」、「閉鎖的なグループが多い」などの傾向も見受けられる。

このような中で、成人余暇活動グループの活性化の要因を探り、あわせて公的機関の役割を明確にすることが求められていると言えよう。そこで、本稿では、以下に述べる基本的視点に立って、主として経済企画庁の調査報告書⁽¹⁾(以下、「経済企画庁調査」とする。)、余暇文化振興会の調査報告書⁽²⁾(以下、「余暇文化振興会調査」とする。))及び千葉県総合教育センターの調査報告書⁽³⁾(以下、「千葉県調査」とする。))の3つの分析を通じて、活性化の要因を探ることとする。

1. 活性化の要因を分析する基本的視点

まず、活性化とは「社会・組織などを活発にすること」(大辞林)と定義される。そのためには、活性化を阻害する要因を除去し、活性化を促す要因を助長することが求められよう。

ここで、活性化している状態が必ずしもすべての人々から見て好ましいとは限らないことをお断りしておきたい。

例えば、スポーツのグループにおいて、対外試合に勝利することを主な目的と

するケースとメンバーの親睦を主な目的とするケースの二つのタイプをよく見かける。前者の場合はメンバーの内部において競争原理が支配し、それがこうずると対立意識が助長され、円満な人間関係をつくることが阻害されるであろう。後者の場合はあくまで人間関係を重視することから、過度の競争を避けようとする。例えば、昭和52年（1977年）以来10年以上にわたって息長く活動しているA市家庭婦人卓球クラブは、「技術の向上のみや試合に勝つことのみを目指すのでは決してなく、あくまでもスポーツとしての卓球を楽しみつつ、健康増進を図り、会員相互の親睦を深めること」を第一義としている。

したがって、試合に勝つための技術の追求をめざす人は、新しいグループを結成するか、他の既存グループに入っていく⁽⁴⁾と言う。

生涯スポーツの普及という観点に立てば、上記のタイプのうち、どちらが好ましいかを断ずることは正しくないであろう。むしろ、上記のような異なった目的の原理に立つグループが共存し、それに参加したい人はいつでも参加することが出来るだけの広がりをもつことが求められるであろう。

本稿では、活性化の要因を次の視点から分析することとしたい。

第一は、グループに内在する要因とグループに外在する要因に分けることである。

つまり、グループ自身の“内部的な努力”によって活性化が図られる面（“内在的な要因”）と、グループを取り巻く環境や公的機関の援助によって活性化が図られる面（“外在的な要因”）に分けて分析することである。さらに、内在的な要因と外在的な要因の相互関係にも言及したい。

第二は、活動を対内的（Intensive）な側面と対外的（Extensive）な側面に分け、主として対外的な活動、特に学習ボランティア活動^{*}の促進という視点から活性化の要因を探りたい。

※ ここで「学習ボランティア活動」とは、「例えば、人々に対する文化・スポーツの普及活動、人々の文流活動、青少年健全育成のための活動、社会教育施設におけるボランティア活動などの、人々の生涯学習を促進することを主な目的とするボランティア活動」と定義しておこう。

2. 成人余暇活動グループ活性化の要因

(1) 内在的な要因と外在的な要因の側面から

まず、活性化の内在的な要因と外在的な要因を、グループの成立の動機、活動の目的、組織・運営などから分析しよう。

ア. グループ成立の動機

経済企画庁調査（注1に示す文献の94～96頁）によると（ $n=354$ ）、「呼びかける人がいて」（42.7%）と「他の団体にいた一部の人たちが中心となって」（14.1%）を合わせた“住民リーダー主導型”（56.8%）が、「行政の指導要請によって」（8.5%）と「行政主催の講習会などの参加がきっかけとなって」（16.1%）を合わせた“行政触発型”（なお、次に述べる余暇文化振興会の調査報告書は“行政主導型”と言う表現を用いているが、“触発型”という表現がより適切と思われる。）（24.6%）を大幅に上回っている。このように住民リーダーという内在的な要因の働きが大きいことが特徴的である。

これに対して、比較的活発に活動しているグループを抽出した余暇文化振興調査（注2に示す文献の32～34頁）では（ $n=294$ ），“行政触発型”は38.1%と、経済企画庁調査を10%以上上回っている。特に「講習会などへの参加」は27.6%を占めている。また、学習ボランティア活動等の地域活動を積極的に行っているグループを抽出した千葉県調査（注3に示す文献の9頁）では（ $n=247$ ），“行政触発型”は46.4%を占め、余暇文化振興会調査をさらに上回っている。

このように、活発なグループ、特に学習ボランティア活動等を積極的に行うグループを生み出す上で、グループ発展の“外在的な要因”としての行政の果たす役割が少なくないことが示されていると言えよう。

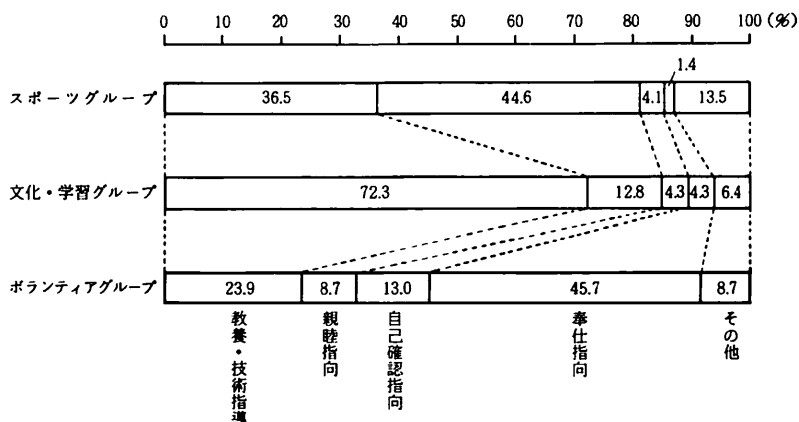
なお、グループの種類別に見ると、余暇文化振興会調査では、ボランティアグループは“行政触発型”が57.1%を占めており、行政の役割が特に大きい。これに対して、文化・学習グループでは、“行政触発型”は41.3%、スポーツグループは29.7%である。

イ. 活動目的

余暇文化振興会調査（37～38頁）によると（図1）、最も重視している活動目的として「会員の知識・教養・技術を高めること」（“教養・技術志向”）をあげるグループは、53.6%と、他の目的に比べてきわだって多い。次いで、「会員同士の親睦を深めること」（“親睦志向”）21.1%、「地域や社会をよくするために役立つこと」（“奉仕志向”）10.7%である。また、“自己確認志向”（会員同士が「興味や悩みを相談し合うこと」、「人間的価値を認め合うこと」、「互いに助け合うこと」、「生活のあり方を変えること」）のグループは、5.7%である。

これをグループの種類別に見ると（図1）、文化、学習グループは教養・技術志向が72.3%、ボランティアグループは奉仕志向が45.7%で、他の目的を引き離している。これに対して、スポーツグループは、親睦志向（44.6%）と教養・技術志向（36.5%）に二分されている。

図1 グループの種類別の活動目的



(資料) (財)日本余暇文化振興会「余暇学習の実践事例に関する調査研究」
昭和60年3月、37頁

このことは、この報告書が指摘するように、グループの目的がグループの性格を規定する重要な要因であることを示していると言える。

なお、経済企画庁調査(83～84頁)では、“親睦志向”が“教養志向”と並ぶなどの相違も見られるが、大筋において同様の傾向である。

ウ. 組織と運営

グループが独立した組織体としての体制を整えることは、グループ活性化のための内在的な要因の中でも、基礎的な要因の一つと言える。

そこで、会則の有無、事務局の所在、財政的な基礎、会員構成等の側面から組織面の実態を分析しよう。

(ア) 会則の有無

まず、会則の有無については、千葉県調査(代表者対象)(11頁)によると、「会則がある」グループは60.7%、「ない」グループは35.6%である。なお、会則の有無はグループの規模との関係が大きい。例えば、「1～9人」のグループは、会則が「ない」方が多い(61.3%)。これに対して、20人以上のグループは「ある」方が多くなる。特に30人以上になると、7割を越えるグループが会則をもっている。このように、グループの規模が大きくなるにつれて、会則をもつグループが多くなるという傾向が見られる。

グループによっては(特に小規模グループの場合)、会則がなくともやっていけ

る、あるいは会則にしばられたくないという声を耳にするが、組織体として共通の目的を達成するためには、最低限の申し合わせないしは会則が求められよう。

(イ) 事務局の所在

次に事務局の所在については、千葉県調査(代表者対象)(11頁)によると、「事務局はない」は23.5%、「会長や会員宅」は36.9%、公民館等の公共機関は32.8%である。

千葉県調査では、この結果について次のように分析している。「事務局」という言葉の理解の仕方がグループによってまちまちであり、単なる連絡場所という軽い意味から団体事務を行う所という意味までの広がりがあったと思われるが、全体として公共機関への依存性が少なくないようである。会員の連絡を含めて、グループの事務に関する仕事は、出来るだけグループ自身で行うことが望ましいと思われる。行政もそのための主体的な力をグループがつけられるよう援助することが求められよう。」(73頁)この指摘のように、グループの“外在的な要因”としての公共機関がグループ本来の仕事まで“請け負う”ことはグループ自身の“内在的な発展”を阻害しかねないと言えよう。

(ウ) 経費の調達方法

経費の調達方法については、余暇文化振興会調査(45～46頁)によると、会費を集めているグループは90.1%を占め、特に多い。

会費以外に会員から徴収する主な財源は、「参加費などの経費」(徴収するグループは21.1%)、「入会金」(20.4%)である。また、「行政の援助・補助」を受けているグループは21.4%を占める。

グループの種類別に見ると、「ボランティアグループ」は51.0%が「行政の援助・補助」を受けており、他のグループに比べてきわだって多い。また、「他団体(自治会、町内会、上部団体等)の寄付や援助」も16.3%で、他のグループより多い。

この報告書が指摘するように、会費は“団体の自主的な基盤をつくる重要な要素”であり、このような団体が多いことは望ましい姿と言えよう。また、補助金は公共性の高い活動を奨励することが本来の役割であり、その意味で補助金に過度に依存することは好ましくないであろう。

なお、千葉県調査(代表者対象)でも、大筋において同様の傾向が見られる。

(エ) グループの規模及び会員構成

グループの目的を遂行するために必要な会員を確保することも、活性化にとって重要な要因と言えよう。

まずグループの規模については、経済企画庁調査によると、50人以内は72.0%、50～99人は13.8%、101人以上は11.9%で50人以内のグループが特に多い。中でも、

254 自由研究

11～20人は31.4%を占める。また、6～10人という少人数のグループも11.6%を占める。

なお、余暇文化振興会調査によると、昭和46年以前に設立されたグループと比べて、昭和55年以降に設立されたグループは、「36人以上」の比率が低下する反面、「25人以下」の比率が増加し、グループの少人数化の傾向が認められる。

次に、千葉県調査（代表者対象）（7～8頁）により、会員の世代別構成（なお、この報告書では20歳未満を「青少年」、20～59歳を「成人」、60歳以上を（高齢者）としている。）を分析しよう。

「成人」（40.1%）と並んで、「成人+高齢者」（36.4%）が多い。また、「成人+青少年」は10.1%、「三世代」は6.1%、「高齢者」は5.7%である。

「成人+高齢者」を始めとして、「世代横断型」のグループが少なくないことが示されている。報告書が指摘するように、これは高齢化社会に対応する新しい動きであり、今後も、世代を越えた活動の幅を広げることが求められよう。

さらに、グループ結成後の会員構成の変化を分析しよう。

結成以来の会員の占める割合をグループの活動年数別に分析した千葉県調査（代表者対象）（10～11頁）によると、活動年数が「4年以下」のグループの過半数は、結成以来の会員の方が多い。これに対して、「5～9年」のグループは、結成以来の会員が半数又はそれ以下が多い。さらに、10年以上のグループは、結成後に加入した会員が多数を占めるグループが多くなる。しかし「結成以来の会員は全くいない」は「15年以上」のグループでも9.4%であり、結成以来の会員が残っている所が多い。

このように、ベテランの会員による伝統の継承と新たな会員の加入による「新しい血液の導入」が適切に成されることがグループの活性化を促していると思われる。

オ. 定例会の実施状況

定例会の実施状況は、千葉県調査（代表者対象）によると、「定例会はなかった」は2.8%であり、ほとんどのグループが定例会を実施している。定例会の回数は、「月1回程度」が特に多く（43.7%）、次いで「月2～4回程度」（29.6%）である。

定例会の曜日は、「月～金の午前」が39.1%で、特に多い。次いで、「月～金の午後」（28.2%）であり、平日の昼間に定例会を行うグループが多いことが示されている。なお、「土曜の午後」は12.6%、「月～金の夜間」は12.2%である。

定例会への会員の参加状況は、63.5%のグループが「大部分の会員が参加した」と答えている。次いで、「半数近くの会員が参加した」（27.7%）であり、総じて

参加状況は良い。なお、グループの規模別では、人数が少ないほど、参加状況が良い。

以上のように、多くのグループにおいて定例会のような日常的な活動が位置づけられ、会員の参加状況も良いという特徴が見られる。これもグループ活動の活性化の重要な要因の一つと言えよう。

カ. 役員活動についての意識とリーダーシップ

グループのリーダー（グループの運営にあたる役員）は活動の推進力とも言えるべき重要な役割を果していると言われている。例えば、明石要一氏は成人グループの事例分析を通じて、「リーダーがまさに集団のキー・パーソンとなっている。」⁽⁵⁾と評価している。しかし、「役員になり手が無い」など、役員活動に対して消極的な傾向も見られる。そこで、以下では役員活動についての意識を分析したい。

千葉県調査（会員対象）によると（ $n=996$ ）、会長・副会長のうち、グループへの加入の際に「自分でメンバーを募り、グループをつくった」人は18.1%である。これに対して役員をしていない人では、1.7%に過ぎない。

その反面、「人から誘われて入った」人の割合は、会長・副会長（18.1%）より役員をしていない人（36.4%）の方が多い。

このように、現在役員をしている人、特に会長・副会長は、グループ加入の際にも能動性が見られる。

次に現在役員をしている人の継続意志については、「誰か他の人がいれば、かわってほしい」が58.3%で、特に多い。これに対して、「今後も続けたい」は24.8%であり、継続意志を持っている人の方が少ないのが実態である。

仕事や家事などで忙しいという事情はあろうが、役員活動への意欲を高めるといことも、今後の課題と言えよう。

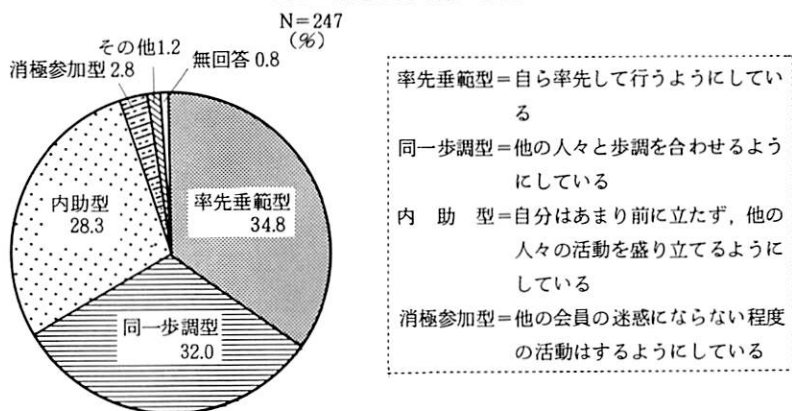
では、役員をしていない人は、役員を引き受けることについて、どのような意識をもっているであろうか。

回答者のうち、その気持ちがない人及び時間的なゆとりがないと答えた人は過半数を占める。これに対して、「自分に出来ることがあったら、引き受けてもいい」は35.8%「自分に出来ることがあったら、積極的に引き受けたい」は6.3%、合わせて42.1%で、前向きの人も少なくない。しかも、若い年齢層の方が前向きである。今後役員活動に意欲的な人を見出し、積極的に“登用”を図っていくこと、特に若い人々の“登用”が求められよう。

さいごに、リーダーシップについて考察しよう。

千葉県調査（代表者対象）によると、まず、活動を行う際の態度としては（図2）、“率先垂範型”が34.8%、“同歩調型”が32.0%、“内助型”が28.3%で、

図2 活動を行う際の態度



(資料) 千葉県総合教育センター「成人余暇活動グループの活性化についての調査」
平成元年3月、53頁

各々3割前後を占めている。これに対して、“消極参加型”は2.8%に過ぎない。

このことは、グループの実情やリーダーの個性に合ったリーダーシップが行われていることを示していると思われる。

次に、活動計画を立案する際の態度は、“漸進型”(従来の活動を引継ぎながら、ある程度新しい内容を取り入れるようにしている。)が70.9%で特に多く、着実な前進を求める傾向が強い。これに対して“継承型”(従来の活動をできるだけ引継ぐようにしている。)や“進取型”(できるだけ新しい内容を取り入れるようにしている。),“刷新型”(従来の活動にはこだわらず、常に活動の刷新に心がけている。)は、10%内外である。

また、活動計画立案の手順についての考えは、“全面参加型”(あくまでも、会員の意見やアイデアを取り入れるように努力すべきである。)が59.5%で特に多く、次いで“部分参加型”(会員の意見を取り入れることはするが、主として役員が話し合って決めるべきである。)は21.5%，“会員中心型”(役員は会員の意見の取りまとめ役に徹するべきである。)は11.7%である。多くのリーダーが会員の意見を積極的に取り入れながら運営する姿勢をもっていることが示されている。

会員の知識や技術を高めることについての態度は、“能力重視型”(意欲的な会員や有能な会員の力を伸ばすことに最も留意している。)(12.9%)より“個性伸張型”(すべての会員の参加意欲を高め、一人一人の個性を伸ばすように努めている。)(68.9%)が多く、一部の会員の能力伸張よりは、全ての会員の個性伸張に

留意するリーダーが多いことが示されている。

会員の人間関係についての態度は、「相互理解重視型」（会員がお互いに理解を深めるように、大いに心がけている。）が73.7%を占め、特に多い。次いで「相互理解考慮型」（会員がお互いに理解を深めるように、少しは心がけている。）が22.7%である。これに対して、「相互理解不要型」は2.0%に過ぎない。多くのリーダーが会員の相互理解を図るために努めていることが示されている。

以上のように、グループの実情やリーダーの個性によってリーダーシップに相違が見られる。同時に、多くのリーダーに共通する特徴として、会員一人一人の個性を尊重し、会員の相互理解に努め、会員の意見を取り入れた運営を心がけ、従来の活動を引継ぎながら徐々に脱皮を図ってこうとする姿勢が浮き彫りにされている。

キ. 活動への参加条件

「グループ活動上の問題点」についてたずねた余暇文化振興会調査（64～67頁）によると、一番目にあげた問題点で特に多いのは、「会員の時間がそろわない」（21.5%）である。次いで、「仲間の不足」（15.7%）、「場・施設の不足」（14.5%）、「指導者の不足」（11.9%）などである。

また、「運営上の問題点」についてたずねた千葉県調査（代表者対象）（29頁）によると（選択肢12のうち、あてはまるものすべてを選択）、「会員が不足している」が35.2%で特に多い。次いで「会員の時間がそろわない」（28.7%）、「役員になり手が少ない（少ない）」（21.9%）、「活動のための施設や設備が不足している」（20.7%）などが比較的多い。

これら二つの調査に共通する傾向として、「会員の時間がそろわない」、「仲間不足」又は「会員不足」などが上位を占めていることである。

しかも、千葉県調査によると、これらの問題をもつグループは、就業する人が増えるにつれて増加する傾向にある。例えば、「多くの人又は全員が就業している」グループは、「会員が不足している」が51.7%、「会員の時間がそろわない」が48.3%である。

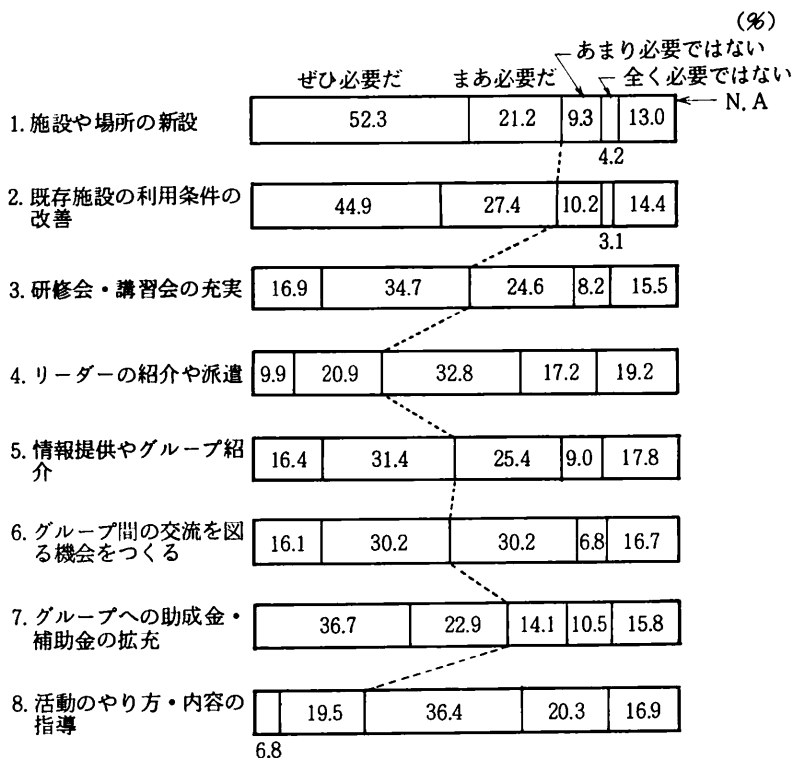
今日、女性の就労化に伴い、平日の昼間における活動への参加が困難になってきている。このような勤労者に対しては、平日の夜間や土曜、日曜その他の休日における活動の機会を促進する必要があるだろう。

ク. 行政の役割

さいごに、行政の役割をグループ活性化の外在的な要因という側面から分析しよう。

経済企画庁調査によると（図3）、行政への要望事項で特に多い事項は「施設や

図3 行政への要望



(資料) 経済企画庁『「コミュニティ形成に資する自由時間活動の構造分析調査」報告書』, 昭和59年2月, 177頁

場所の新設」(「ぜひ必要」+「まあ必要」=73.5%)「既存施設の利用条件の改善」(72.3%)である。また、「グループへの助成金・補助金の拡充」(59.6%)も比較的多い。

以上のように、活動のための条件整備に関する事項が多いという特徴がある。また、これらは「ぜひ必要」の比重も高く、切実性が強いグループが少なくないことが示されている。

次いで、「研修会・講習会の充実」(51.6%)、「情報提供やグループ紹介」(47.8%)、「グループ間の交流を図る機会をつくる」(46.3%)などのいわゆるソフトサービスの充実に関する事項があげられている。しかも、これらは、いずれも「必

要でない」「あまり必要でない」+「全く必要でない」という回答を上回っている。

これに対して、「活動のやり方・内容の指導」については、「必要でない」が56.7%で、「必要」(26.3%)を20%程度上回っている。行政に対して指導的な役割でなく、援助的な役割を期待するグループが多いことが示されていると言えよう。また、行政もこのようなグループの意向に、十分留意することが求められていると思われる。

余暇文化振興会調査及び千葉県調査でも大筋において同様な傾向が見られるが、余暇文化振興会調査では、「施設の用具・設備の充実」(注。これは、経済企画庁調査では設けていない項目である。)が56.6%を占め、「場や施設の設置」(74.4%)に次いでいる。このように、施設の整備と合わせて、設備面でも、グループ活動を支えるために充実を図ることが求められよう。

また、千葉県調査では、独自の項目である「会員募集や活動の広報を行うこと」(78.7% 注。この設問の分析では、無回答を除いて処理している。)及び「すぐれた活動を奨励すること(例。広報による紹介、奨励金の支出、顕彰など)」(71.9%)などのソフトサービスへの要望も比較的多い。なお、研修会の実施については、「研修の企画や運営方法などの研修会」と「専門的な知識・技術についての研修会」の二つに分けてたずねているが、後者が69.5%で、前者(53.9%)より多いという特徴がある。

最後に、千葉県調査(会員対象)(67～68頁)により、社会教育施設職員に対してグループの会員が何を期待しているかを分析しよう(選択肢8つの内、2つまで選択)。

特に多いのは、「施設を利用しやすいように援助すること」(45.7%)及び「気軽に話ができて、活動の良き援助者になること」(39.4%)である。次いで、「活動の機会、利用できる施設、指導者などについて情報を提供すること」(24.4%)、「グループ活動の意義について地域社会の理解を深めること」(15.4%)である。

職員に対して、活動への援助者及び良き理解者としての期待が大きいことが示されていると言えよう。

(2) 対内的な活動の側面と対外的な活動の側面から

次に、活動の方向を、対内的(内部的)な活動の充実・発展というインテンシブ(Intensive)な側面と対外的な活動の発展というエクステンシブ(Extensive)な側面に分け、活性化の要因を探ろう。特に、対外的な活動の促進要因を学習ボランティア活動を中心として分析することとする。以下、ア～エは千葉県調査(代表者対象)(24～28頁)に基づき、オは千葉県調査(会員対象)(61～64頁)に基

づいて分析したい。

ア. 活動内容

まず、活動内容の面から分析しよう。

表1に示されるように、「例会活動」や「親睦活動」を始めとする対内的な活動の実施率が高く、「例会活動」69.6%、「親睦活動」62.4%などとなっている。

なお、これらはどの種類のグループでも実施率が高い。

このことは、これらの対内的な活動、特に例会活動が、多くのグループにおいて活動の軸になっていることを示していると言えよう。

これに対して、対外的な側面については、表1に示されるように、「他グループとの交流活動」、「学習ボランティア活動」、「福祉活動等」の三つの分野に分けることができる。

まず、他のグループとの交流活動は、同じ市町村が33.2%、市町村外が20.7%であり、同じ市町村における交流の方が多い。

次に、学習ボランティア活動では、「公民館におけるボランティア活動」(34.0%)、「住民相互の交流」(30.8%)、「芸術文化の普及」(26.3%)、「青少年や幼児を対象とした講演や指導」(22.7%)などが比較的多い。

また、福祉活動等の地域活動では、「身障者、老人などへの福祉活動」が特に多く、30.4%である。

このように、対外的な活動では、実施率の高い項目でも30%台である。しかし、グループの種類による相違が顕著に表れている。

例えば、他のグループとの交流活動は、青少年教育グループの約半数(51.1%)が同じ市町村内のグループとの交流を行っている。

また、学習ボランティア活動で比較的多い内容は、学習・教養グループ及び文化・趣味グループでは、「芸術・文化の普及」が各々36.4%、35.8%を占める。

スポーツ・レクリエーショングループでは、「スポーツ・レクリエーションの普及」(46.4%)が多い。

青少年教育教育グループでは、「青少年や幼児を対象とした公演や指導」が62.2%で特に多い。また、「郷土史・民話・昔話・遊びの伝承」(44.4%)及び「公民館におけるボランティア活動」(44.4%)も比較的多い。

福祉・地域活動グループでは、「身障者・老人などへのボランティア活動」(59.2%)が多い。

以上の傾向は、各々のグループがその持ち味を生かして対外的な活動を行っていることを示唆している。今後ともグループの個性を生かした学習ボランティア活動等を助長することが求められよう。

成人余暇活動グループ活性化の要因についての一考察 261

表1 活動内容（いくつでも選択）

％、（ ）内はグループ数

活 動 内 容		全 体	グ ル ー プ の 種 類 別					
			グ ル ー プ 学 習 ・ 教 育 ・ 教 育	グ ル ー プ 文 化 ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン	グ ル ー プ ス ポ ー ツ ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン	グ ル ー プ 青 少 年 教 育	福 祉 活 動 ・ 地 域 活 動	
対内的 活 動	1. 例会活動（会員の学習会、実習、練習など）	69.6	81.8	70.4	71.4	68.9	64.8	
	2. 親睦活動	62.4	77.3	64.2	71.4	48.9	60.6	
	3. 野外活動	29.2	45.5	27.2	25.0	15.6	36.6	
研修活動等	4. 行政等が主催する講演会・講習会への参加	44.5	77.3	25.9	39.3	40.0	60.6	
	5. 同じ市町村内のグループとの交流	33.2	22.7	32.1	35.7	51.1	25.4	
	6. 市町村外のグループとの交流	20.7	18.2	18.5	14.3	24.4	23.9	
学 習 ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	交流 活動							
	7. 住民相互の交流	30.8	9.1	29.6	25.0	44.4	32.4	
	8. 国際理解・国際交流	9.3	13.6	12.4	7.1	6.7	7.0	
	指導 普及 活動	9. 社会生活、家庭生活、自然についての知識・ 技術の普及	10.1	18.2	1.2	14.3	2.2	21.1
		10. 芸術文化の普及	26.3	36.4	35.8	14.3	37.8	9.9
		11. 郷土芸能の伝承、伝統文化の継承	6.9	9.1	14.8	3.6	4.4	0
		12. スポーツ・レクリエーションの普及	10.1	9.1	2.5	46.4	8.9	5.6
		13. 青少年や幼児を対象とした公演や指導	22.7	0	18.5	10.7	62.2	14.1
		14. 青少年や幼児を対象とした郷土史・民話・昔 話・遊びの伝承	13.4	13.6	8.6	3.6	44.4	2.8
		15. 家庭教育促進のための活動	8.5	9.1	4.9	3.6	15.6	9.9
	施設 ボラ ンテ ィア 活動	16. 公民館におけるボランティア活動	34.0	31.8	23.5	21.4	44.4	45.1
		17. 図書館におけるボランティア活動	9.7	9.1	2.5	0	20.0	15.5
		18. 博物館におけるボランティア活動	0.4	0	0	0	2.2	0
		19. 青年の家、少年自然の家におけるボランティ ア活動	4.5	0	2.5	7.1	6.7	5.6
		20. その他の社会教育施設、学校等におけるボラ ンティア活動	13.0	0	8.6	14.3	22.2	15.5
福祉活動等	21. 身障者、老人などへの福祉活動	30.4	9.1	19.8	21.4	20.0	59.2	
	22. 地域の環境美化のための活動	8.9	9.1	6.2	7.1	4.4	15.5	
	23. 地域の防災、防犯、交通安全のための活動	3.6	4.6	0	3.6	0	9.9	
	24. 人々の消費生活向上のための活動	2.8	4.6	1.2	0	0	7.0	
そ の 他	25. その他	10.1	18.2	3.7	3.6	17.8	12.7	
無 回 答		1.6	4.6	2.5	3.6	0	0	
合 計		100.0 (247)	100.0 (22)	100.0 (81)	100.0 (28)	100.0 (45)	100.0 (71)	

（資料）千葉県総合教育センター、前掲書、24頁

イ. 始めたきっかけ

次に、学習ボランティア活動等を始めたきっかけは、「役員（運営委員）の中に呼びかける人がいた」と「行政（職員）からの呼びかけに応えた」が共に29.6%で比較的多い。

「行政（職員）からの呼びかけ」と「行政主催の講習会に参加」（9.5%）を合わせると39.1%と4割近くを占めており、行政がきっかけづくりに少なくない役割を果たしていることが示されている。

また、リーダー（役員）の役割も少なくないことが示されていると言えよう。

ウ. 活動の曜日

次に学習ボランティア活動等を行った曜日について分析しよう。

平日（午前、午後）と並んで、土曜の午後及び日曜日（午前、午後）が主な活動日となっている。これに対して、(1)オで分析したように、例会の曜日は平日、特に午前が主な活動日である。

これは、例会は平日などの会員の最も都合の良い時間帯に行い、学習ボランティア活動等は平日、休日を問わず、住民の要望に応じて前向きに対応しようとする姿勢の表れと思われる。

エ. 学習ボランティア活動等のメリット

それでは、リーダーは会員が学習ボランティア活動等に参加することが、会員にとってどのようなメリットがあると評価しているのでしょうか。表2に示すように、①会員へのプラスの面、②社会への寄与の面、③グループに対する外からの評価の面に分けて分析しよう。

このように分けてみると、「会員の相互理解やつながりの深まりが得られた」(57.8%)や「会員の心の支えや生きがい得られた」(48.3%)を始めとして、会員へのプラスの面への評価が高いという特徴が浮き彫りになる。特に、会員の相互理解や地域の人々との交流などの人間関係についてのメリットへの評価が高い。

次に社会への寄与の面では、「活動の普及を図ることができた」(45.0%)が比較的多い。

また、①、②の両者に関わる「地域の人々とのおつきあいや交流を深めることができた」も52.3%を占めている。なお、④の「グループに対する周囲の評価が高まった」も、38.8%を占めている。

このように、4つの側面からの評価が見られる。特に、学習ボランティア活動のような対外的活動においても、会員の人間関係の深まりを始めとする会員へのプラスの面、換言すれば対内的なメリットの評価が高い。このことは、学習ボランティア活動の促進がグループの対内的な活性化を促す要因としても作用する

表2 学習ボランティア活動等のメリット（いくつでも選択）

％、（ ）内はグループ数

メ リ ッ ト		全 体	グ ル ー プ の 種 類 別					
			グ ル ー プ 学 習 ・ 教 育 的 意 義	グ ル ー プ 文 化 ・ 趣 味	ス ポ ー ツ ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン グ ル ー プ	グ ル ー プ 青 少 年 教 育	活 動 グ ル ー プ	福 祉 活 動 ・ 地 域
①会員への プラスの面	1. 会員の心の支えや生きがいを得られた	48.3	46.7	47.0	31.3	53.3	50.8	
	2. 会員の参加意欲が高まった	36.4	46.7	50.0	12.5	35.6	26.9	
	3. 会員の相互理解やつながりを深めることができた	57.4	66.7	54.6	43.8	66.7	55.2	
	4. おたがいに助け合う気持ちを育てることができた	40.7	40.0	34.9	43.8	37.8	47.8	
②社会への 寄与の面	5. 活動の普及を図ることができた	45.0	46.7	42.4	56.3	53.3	38.8	
	6. 地域の文化やスポーツの発展に寄与することができた	23.9	40.0	30.3	37.5	24.4	10.5	
	7. 青少年の健全育成に寄与することができた	22.5	20.0	10.6	25.0	46.7	17.9	
	8. 身障者や高齢者などの役に立つことができた	33.5	20.0	21.2	50.0	17.8	55.2	
	9. 住みよい地域づくりに寄与することができた	14.8	13.3	9.1	25.0	8.9	22.4	
③ ①②の 両 面	10. 地域の人々とのおつきあいや交流を深めることができた	52.2	33.3	54.6	56.3	62.2	46.3	
④グループ への評価の面	11. グループに対する周囲の評価が高まった	38.8	26.7	39.4	31.3	53.3	32.8	
⑤その他	12. その他	2.9	0	1.5	0	4.4	4.5	
無 回 答		7.7	13.3	12.1	0	4.4	6.0	
合 計		100.0 (209)	100.0 (15)	100.0 (66)	100.0 (16)	100.0 (45)	100.0 (67)	

（資料）千葉県総合教育センター、前掲書、28頁（但し、メリットの区分は若干変更した。）

ことを示していると言えよう。

なお、グループの種類別に見ると、「会員の相互理解やつながり」は、スポーツ・レクリエーショングループを除いて、5割台～6割台を占める。

この他のメリットについては、文化・趣味グループは、「地域の人々とのおつきあいや交流」（54.6％）が上位を占める。スポーツ・レクリエーショングループは、「活動の普及」（56.3％）及び「地域の人々とのおつきあいや交流」（56.3％）が上位を占める。青少年教育グループは、「地域の人々とのおつきあいや交流」（54.6％）が上位を占める。また、「青少年の健全育成への寄与」（46.7％）は、他のグループより多い。ボランティア・地域活動グループは、「身障者や高齢者への寄与」（55.2％）が上位を占める。

このように、社会への寄与という対外的な側面については、グループの種類による違いが顕著に示されている。これは、グループの種類によって学習ボランティア活動等の主なねらいが異なっていることに対応していると思われる。

オ. グループ活動への期待

最後に、千葉県調査(会員対象)(61～64頁)に基づき、会員がグループ活動に何を期待するかを分析しよう(表3)。

最も多い期待は「親しい友人や仲間を得ること」で90.2%を占める。次いで、「知識・技術の習得」、「生きがいを得る」、「生き方の見直し」、「会員同士の切磋琢磨」などの、会員自身のメリットに関する事項が70%台の後半～90%台を占める。

他方で、対外的な活動については、「地域の人々との交流」、「グループの交流」などの対外的な交流活動に関する期待が比較的多く、70%近くを占める。次いで、「福祉への寄与」、「地域文化の継承・発展」、「青少年の健全な成長」、「住みよい地域づくり」などがいずれも60%台を占めている。

ここで「グループ活動を通じて得られたこと」と比較すると、表2に示すように、対外的な活動に関する期待は「得られたこと」に比べて上回る事項が多い。特に「地域を越えた交流や国際交流」、「地域文化の継承・発展」、「青少年の健全な成長」、「福祉への寄与」、「住みよい地域づくり」などは27～33%上回っており、現状に比べて期待が大きいことが示されている。今後このような会員の意欲を現実化することが課題となろう。

なお、グループの種類別に見ると(表3)、どのグループも「親しい友人や仲間」が特に多いといった共通性もあるが、相違点も大きい。例えば、対外的な活動については、グループによって上位を占める項目が異なっており、しかも意欲的な会員が少なくない。このことは、会員がグループの個性を生かした対外的な活動を発展させたいと望んでいることを示していると思われる。

おわりに

以上、成人グループ活性化の要因を二つの側面から考察した。まず、内在的要因と外在的要因の関係については、基本的にはグループ自身の内在的要因の発展を促すことが肝要であり、外在的要因もそのためにプラスに働くことが求められる。本稿では、グループ成立の動機、活動目的、組織・運営などの面から内在的要因の分析を行い、今後の課題を示した。これらの中で、かなめとなるものはリーダー(役員)の役割であろう。つまり、リーダーがグループ活性化の方向に

表3 グループ活動に期待すること（活動を通じて得られたこととの比較）

期待すること (得られたこと)		全 体 (n=827)	グループの種類別					
			1 グ学 ル習・ 教 ブ養 (n=206)	2 グ文 ル化・ 趣 ブ味 (n=201)	3 エー スポ ーツ・ レク リ エー シヨ ンク ラフ (n=107)	4 グ青 ル少 年 教 育 (n=123)	5 グ福 ル祉 活 動 (n=124)	6 美生 化活 グ改 ル善 ー環 ブ境 (n=66)
主として 会員自身の メリットに 関すること	ア. 生きがいを得る	83.2 (83.2)	84.4	85.6	86.0	80.5	78.2	81.8
	イ. 生き方の見直し	80.2 (77.4)	83.0	79.0	82.0	78.7	76.9	80.3
	ウ. 意見・考えの活動化	68.8 (62.4)	65.0	74.0	68.6	79.7	57.2	66.7*
	エ. 他人からの評価を高める	49.3 (56.5)	41.3	64.2	46.6	56.2	33.7	50.0
	オ. 個性や特技を生かす	71.8 (64.6)	67.7*	84.7*	72.2	73.8	62.6*	58.5
	カ. 知識・技術の習得	84.3 (77.0)	90.0	87.4	86.0	80.4	79.5*	71.2
	キ. 健康の維持・増進	62.6 (59.1)	57.4	65.1	95.4	46.7	44.7	86.7
	ク. 親しい友人や仲間を得る	90.2 (89.8)	89.6	90.9	94.6	92.5	84.0	89.0
	ケ. 会員同士の切磋琢磨	79.8* (66.1)	80.1*	83.6*	80.2	83.6	71.8*	75.4*
主として 対外的活動 に関すること	コ. コンクール・競技会の成績	23.4 (—)	15.4	38.5	29.9	17.7	12.5	23.5
	サ. 他グループとの交流	69.2* (50.6)	60.6*	77.7*	75.4*	74.4*	61.5*	65.6*
	シ. 地域の人々との交流	69.5* (55.7)	63.9*	75.9*	65.4	72.4*	64.8*	79.1*
	ス. 地域を越えた交流や国際交流	58.2* (29.7)	57.3*	68.1**	59.4**	50.5*	55.8**	48.5*
	セ. 地域文化の継承・発展	63.4* (36.8)	72.5**	69.8*	64.5**	43.7	43.3*	57.8*
	ソ. 地域スポーツの発展	33.5* (16.1)	27.8*	33.0*	69.2*	16.7*	21.8*	44.4**
	タ. 青少年の健全な成長	63.1** (31.6)	53.5**	65.1*	68.0**	79.9*	52.5**	64.0**
	チ. 福祉への寄与	63.5** (30.2)	63.2**	55.9**	63.9**	60.5**	80.6*	80.0**
	ツ. 住みよい地域づくり	62.0** (29.4)	62.8**	59.9**	69.3**	47.1**	63.9**	80.7*

注1 回答数(n)は無回答を除いて処理しているため、項目によって異なる。なお、表示した数は「ア」の回答数である。

注2 数字は「期待すること」、()内の数字は「得られたこと」の％である。

注3 *印は「得られたこと」に比べて10～19%、**印は20～29%、***印は30～49%上回る項目である。

(資料) 千葉県総合教育センター、前掲書、60頁及び63頁より作成

ついて正しい認識をもち、積極的にリーダーシップを発揮することによって活性化が図られる面が少なくないと思われる。したがって、今後リーダーの確保と資質向上のための有効な方策が求められよう。

次に外在的要因については、グループ活動への会員の参加条件と行政の役割の二つの面に注目した。まず、参加条件では、「会員が少ない」、「会員の時間がそろわない」という問題点をあげたグループが比較的多く、しかも就業者が多いグループに顕著である。こうした問題に対処するための有効な方策が求められよう。同時に、女性の就労化が進む今日、また成人男性の参加を促進するためにも、勤労者に対して、平日の夜間、土曜、日曜その他の休日における活動機会を拡充することが求められよう。(なお、これは次に述べる行政の役割とも関係があらう。)

行政の役割については、多くのグループが指導者としての役割ではなく、援助者としての役割を求めている。具体的には、施設・設備の整備や利用条件の改善、補助金・助成金の支出などの条件整備への期待が大きい。次いで、会員募集・広報活動、情報提供、交流活動への援助などのソフトサービスを期待している。また、社会教育施設職員に対しては、グループ活動の援助者、良き理解者としての期待が大きい。

今日、行政職員の中には、一方においてグループ活動への無理解・無関心という傾向が、他方においてグループ本来の仕事を請け負ったり、グループを上から指導しようとする傾向が見受けられる。今後は、グループ自身の内在的發展を促進するという視点に立った援助が求められよう。

次に、対内的活動と対外的活動の側面については、主として学習ボランティア活動をはじめとする対外的な活動を促進するという視点から考察した。その結果、今日学習ボランティア活動が多面的な広がりを見せており、しかも各々のグループがその持ち味を生かして意欲的に取り組んでいることの一端を知ることができた。しかも、これらの活動は(リーダーの評価によると)会員の相互理解の深まり、心の支えや生きがいを得られるなどの対内的なメリットも大きい。つまり、グループの結集力を強める動きをしていると言えよう。また、会員が学習ボランティア活動に寄せる期待も大きい。例えば「地域を越えた交流や国際交流の促進」への期待は、これまでに「得られたこと」に比べて30%近く上回っている。

今後は会員の意欲を生かして学習ボランティア活動を促進するとともに、地域を越えたネットワークづくりが求められよう。また、行政も先進的な事例の紹介、研修機会や交流機会の提供(援助)などを通じて学習ボランティア活動を奨励することが求められよう。

注

1. 経済企画庁国民生活局「『コミュニティ形成に資する自由時間活動の構造分析調査』報告書」、大蔵省印刷局、昭和59年2月

なお、この調査は東京都中野区鷺宮地域における自由時間活動グループ(498グループ)のリーダーを対象として面接留置法で実施した。調査期間は昭和58年1月10日(月)～29日(土)、回収数は354グループ(回収率71%)である。

2. 財団法人余暇文化振興会『余暇学習の実践事例に関する調査研究』、昭和60年3月

なお、この調査は広域市町村圏の中核部市の社会教育課又は中央公民館に照会して推薦を得た629団体(106広域圏)に対して郵送法によりアンケート調査を実施した。回収数は294団体(回収率46.7%)である。

3. 千葉県総合教育センター『成人余暇活動グループの活性化についての調査—学習ボランティア活動の促進を中心として—』、平成元年3月

なお、この調査は代表者調査と会員調査の2つから成る。代表者調査では、千葉県内の県立社会教育施設と教育委員会に対して、学習ボランティア活動を積極的に行っている成人余暇活動グループの推薦を依頼し、推薦を得た298グループの代表者に対して郵送法によりアンケート調査を実施した。実施期間は昭和63年2月5日～3月5日、回収数247グループ(回収率82.9%)である。会員調査では、代表者調査で協力を得たグループの中からグループの種類、人数等を考慮して64グループ1,367名を抽出し、郵送法によりアンケート調査を実施した。実施期間は昭和63年11月1日～12月15日、回収数は982名(回収率71.8%)である。

4. 財団法人余暇文化振興会『余暇学習の活性化に関する調査研究』、昭和61年3月、22～23頁

5. 財団法人余暇文化振興会、前掲書、40頁